

京都大学人文科学研究所共同研究実績・活動報告書

(5年計画の4年目)

1. 研究課題

龍門北朝窟の造像と造像記

Buddhist Sculptures and their Inscriptions in the Longmen Caves of the Northern Dynasties

2. 研究代表者氏名

稲本泰生

Inamoto Yasuo

3. 研究期間

2017年4月-2022年3月(4年目)

4. 研究目的

龍門石窟は東アジアで最も重要な仏教遺跡の一つである。本研究所東方学研究部の前身である東方文化研究所の水野清一・長廣敏雄は戦前に調査研究を行い、報告書『龍門石窟の研究』(1941年)を出版した。のちに『雲岡石窟』を出版する兩人による同書は、今日も基礎研究としての価値を失っていない。また龍門には夥しい数の造像記が遺っており、これについての研究も、清代以来の膨大な蓄積がある。水野・長廣が実施した現地調査は、僅か6日間にとどまった。このため多くの課題が後考に委ねられたが、戦後の中国における考古学の発展は、文字史料を造形資料から切り離すことなく相互に参照する研究を可能にし、新たな知見をもたらした。しかし北魏窟に限っても、開鑿の主体と過程、主要造像の編年など基本的なところで、今なお論者の見解が大きく分かれる部分が少なからずある。最近、龍門造像記の拓本多数が、所内で新たに確認されるに至った。本研究では研究所における石窟研究の伝統を継承し、北朝期の龍門における造像とその背景について、現在整理中であるこの資料群を活用して再考する。活動の中心に据えるのは造像記の文面の再確認と、内容の理解である。そこから得られる情報をもとに、石窟の造営経過や彫刻の様式・図像などの問題に対し、美術・考古・歴史・宗教・社会等の観点から総合的な検討を加え、今後の龍門研究の基盤となる共通認識の形成をめざす。

The Longmen Caves are one of the most important Buddhist sites in East Asia. In 1941, Mizuno Seiichi and Nagahiro Toshio from Institute of Oriental Studies (now Department of Oriental Studies, Institute for Research in Humanities) published the report "A Study of the Buddhist Cave-Temples at Lung-mên, Ho-nan" after

conducting fieldwork in the area. The report remains relevant to any research on the Longmen Caves today. Subsequently, the two scholars published the paramount and highly acclaimed series entitled “Yun-Kang: The Buddhist Cave-Temples of the Fifth Century A.D. in North China” on the Yungang Caves in the 1950s. Since the Qing Dynasty, there have been many studies of the enormous number of inscriptions carved in the Longmen Caves. Yet since Mizuno and Nagahiro visited the site for a mere six days, many research topics had to be left to later scholars. In the development of archeology in postwar China, comparative analysis of both textual and stylistic sources has generated new scholarly insights for future research. Yet, even within scholarship concerning the Northern Wei caves of Longmen, opinions remain sharply divided on fundamental issues such as the commissioning and the construction process of the caves, as well as the dating of the major statues. Recently, the Institute of Oriental Studies has identified a rich collection of rubbings of the Longmen inscriptions. The proposed project therefore not only continues the institute’s tradition of researching Buddhist cave temples, but it also aims to reorganize and fully utilize the information gathered thus far to rethink Northern Dynasties statues and their context. The project thus focuses on reconfirming the transcriptions of the inscriptions and understanding their contents. Based on the information gained from that research, we shall consider issues such as the process of creating the caves and the style and iconography of the sculptures through a comprehensive study integrating art-historical, archeological, historical, religious, and social perspectives. In so doing, we hope to form a common foundation of knowledge that will serve as the basis for future Longmen studies.

5. 本年度の研究実施状況

当班では龍門古陽洞所在の造像記約 700 件のうち、まず有年紀分を対応する造像とともに取り上げて確認・検討を進め、2018 年末で全点の検討を完了した。2019 年 1 月からは無紀年・無銘分も含めた全ての造像について、壁面のブロック単位で網羅的に再検討する作業を進め、2021 年 2 月を以て外壁を含む全壁面の検討を完了した。当初は 2017～2019 年度の三年計画であったが、これまでの実績に鑑みて研究期間を二年間延長し、検討対象を古陽洞以外の北朝窟にも拡げて作業を継続するとともに、信頼できる資料集の公刊に向けた確認・編集作業に取り組んでいる。本年度はコロナ禍で 4 月・5 月は休会となったが、6 月末以降は基本的にオンライン、一部対面併用で研究会を再開した。造像・造像記を検討する通例の会に加え、佐藤智水氏が「古陽洞開鑿期における造営の主体について」、檜山智美氏が「クチャの仏教石窟寺院と説一切有部の分派に関する考察」、田林啓氏が「中国の神異僧像をめ

ぐって」と題して研究発表を行った。

6. 本年度の研究実施内容

- 2020-06-23 古陽洞北壁下段の再検討 発表者 稲本泰生 京都大学
2020-09-15 古陽洞開鑿期における造営の主体について 発表者 佐藤智水 龍谷大学
2020-09-29 古陽洞北壁下段の再検討 発表者 稲本泰生 京都大学
2020-10-27 古陽洞南壁下段の再検討 発表者 向井佑介 京都大学
2020-11-10 古陽洞南壁下段の再検討 発表者 向井佑介 京都大学
2020-11-24 古陽洞南壁下段の再検討 発表者 向井佑介 京都大学
2020-12-08 古陽洞南壁下段の再検討 発表者 向井佑介 京都大学
2021-01-12 古陽洞南壁下段・西壁北側の再検討 古陽洞南壁下段の再検討 発表者 向井佑介 京都大学 古陽洞西壁北側の再検討 発表者 稲本泰生 京都大学
2021-02-09 古陽洞外壁の再検討 発表者 稲本泰生 京都大学
2021-03-09 中国仏教美術研究の最前線 クチャの仏教石窟寺院と説一切有部の分派に関する考察-石窟の空間構成と壁画図像を手掛かりに- 発表者 檜山智美 京都大学 中国の神異僧像をめぐって-南北朝時代からの系譜 発表者 田林啓 白鶴美術館

7. 共同研究会に関連した公表実績

なし

8. 研究班員

所内

岡村秀典、安岡孝一、向井佑介、倉本尚徳、高志緑

学内

内記理（文化財総合研究センター）、檜山智美（白眉センター）、アヴァンツィ・カルロッタ（大学院文学研究科）

学外

外山潔（京都市立芸術大学）、齋藤龍一（大阪市立美術館）、山名伸生（京都精華大学）、大西磨希子（佛教大）、石松日奈子（東京国立博物館）、濱田瑞美（横浜美術大学）、北村一仁（河南農業大）、田林啓（白鶴美術館）、高橋早紀子（愛知学院大学）、苫名悠（大阪大谷大学）、黄盼（中国社会科学院）、上枝いづみ（金沢大学）、王珏人（大阪大学大学院）、佐藤智水（龍谷大学 客員教授（人文科学研究所非常勤講師））

9. 共同利用・共同研究の参加状況

区分	機関数 (必須)	受入人数					延べ人数				
		総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生	総計	外国人	若手研究者 (40歳未満)	若手研究者 (35歳以下)	大学院生
			(3)	(1)	(2)	(2)		(1)	(22)	(5)	(17)
学内(法人内)	3	9	1	3	3	1	67	5	19	19	5
国立大学	1	1					4				
公立大学	1	1					1				
私立大学	6	6		2	2		30		2	2	
大学共同利用機関法人											
独立行政法人等公的研究機関	4	4	1	2	2		10	2	4	4	
民間機関	1	1		1			6		6		
外国機関	2	2	1	1	1	1	11	2	2	2	2
その他											
計	18	24	3	9	8	2	129	9	33	27	7
		(11)	(3)	(6)	(6)	(2)	(56)	(9)	(24)	(24)	(7)

10. 本年度 共同利用・共同研究を活用して発表された論文数

	共同利用・共同研究による成果として発表された論文数			
			うち国際学術誌掲載論文数	
①人文研に所属する者のみの論文(単著・共著)				
②人文研に所属する者と人文研以外の国内の機関に所属する者の論文(共著)				
③人文研以外の国内の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)				
④人文研を含む国内の機関に所属する者と国外の機関に所属する者の論文(共著)				
⑤国外の機関に所属する者のみの論文(単著・共著)	1			

11. 費目の30%を超える大幅な変更があった場合の変更理由
なし

12. 次年度の研究実施計画

次年度は龍門北魏窟のうち、文字資料の質量において古陽洞に次ぐ存在である蓮華洞を取り上げ、その造像と造像記について網羅的な再確認・再検討作業を行う。古陽洞については過去四年間の成果を整理再編し、約 700 点の造像記すべての釈文や研究所蔵拓を集成した資料集の刊行に向けて、編集作業を進める。

13. 次年度の経費

なし

14. 研究成果公表計画および今後の展開等

次年度は本研究班の最終年度にあたり、古陽洞に関しては年度内に研究成果となる資料集の刊行を開始し、5年に及んだ期間終了後も継続する予定である。より信頼度の高い成果の創出につなげるべく龍門石窟研究院との交流を強め、研究面での連携の可能性も模索する。龍門北魏窟は古陽洞・蓮華洞にとどまらず引きつづき検討を要するため、2022 年度以降開始される新規班の活動にも、研究対象として組み込みたい。